

# 新『教会通信』(2020年11月)

☆(聖書に今日を聞く)☆

伊豆イエス之御霊教会

牧師 三崎 紘

伊東市十足324-37

TEL 0557-45-3692

FAX 0557-45-7081

<http://izukogen.wonderful.to>

ハレルヤ!

◎『それ神にしたがう憂<sup>うれい</sup>は、悔<sup>く</sup>いなきの救<sup>すくい</sup>を得るの悔<sup>くい</sup>改<sup>あらため</sup>を生じ、  
世<sup>うれ</sup>の憂<sup>うれ</sup>いは死を生ず。』

(コリント後書第7章10節)

信仰とは、神様の御<sup>みおし</sup>教え・御<sup>おんみちび</sup>導きに“従う事”であります。

豊富な知識と指導された事柄<sup>おこない</sup>に行為が伴った時、初めて、真の信仰と言えるのであって、ただ真の神様の存在を信ずるだけなら、悪魔<sup>あくま</sup>だって信じている、と聖書は切り捨てております。(ヤコブ2:17以降をご必読あれ)

尚、“憂<sup>うれ</sup>い”とは、心の裡に生ずる歎<sup>なげ</sup>き悲しむ事であり、心配事であり、つまり心の悩み・葛藤<sup>かつとう</sup>であり、個人の内的戦いと言えましょう。

では“神に従う憂<sup>うれい</sup>”とは、どんな状態なのか?

我々が生活する一般的社会の秩序は、人間的・肉<sup>あ</sup>的思考の中から編み出された価値観<sup>もとい</sup>が基<sup>もと</sup>となっており、聖書に記録されております神様の御<sup>みむね</sup>旨<sup>みこころ</sup>・御<sup>みこころ</sup>心とは、遠く乖離<sup>かいり</sup>しております。

そこで生じて来るのが、“神に従う憂<sup>うれ</sup>い”となります。

私たち真<sup>まこと</sup>の信者は、主イエス様が必ず御臨在<sup>りんざい</sup>なされる教会堂の安息日礼拝や日曜聖会に出席<sup>すす</sup>して、神様に直接お祈りをお献<sup>ささ</sup>げし、また教会の牧師のお勧めやお説教を拝聴し、神様の聖言<sup>みことば</sup>を戴<sup>さ</sup>く機会に恵まれます。

そこで耳に致します聖言<sup>みことば</sup>と、それに絡<sup>から</sup>んだお勧めやお説教をしっかりと拝聴し、智慧<sup>はいちよう</sup>と聡明<sup>ちえ</sup>とを得る者は幸いです。

しかし、全ての者が、聖言<sup>みことば</sup>を正しく感得<sup>かんとく</sup>しているとは限りません。

むしろ、その逆<sup>ほう</sup>の方が多く、人間的に真面目<sup>まじめ</sup>に取り組もうとすればする程、心の裡で葛藤<sup>かつとう</sup>が始まり、憂<sup>うれ</sup>いが生じて参ります。

例えば“愛”と言う言葉。

主イエス様は、最後の晩餐<sup>ばんさん</sup>の折(ヨハネ13:34, 35)、新しき誠<sup>いまし</sup>めとしての“愛”に就<sup>つ</sup>いて語られました。

旧約聖書に沢山の律法<sup>おきて</sup>が記載されておりますが、主イエス様は、総ての律法<sup>おきて</sup>とそれを教え指導する預言者の言葉とは、“愛”<sup>いちげん</sup>の一言に尽きる、とマタイ傳第22章34節以下で仰有<sup>おつしや</sup>っておられます。

つまり、旧約聖書登場のユダヤ人たちが生命を賭して守ろうとしたあの“十戒”を始めとする総ての律法は、『第一に神様を愛する事、第二はその第一に等しい愛を以て貴方自身と貴方の隣人を愛しなさい』と言う新しい“愛”なる誠め中に含まれている、と言われたのであります。

故に、貴方は“愛”を中心とした日々の生活の中に身を置きなさい、と此の新しい“誠命”が旧約の戒律に替って申し渡されたのです。

また主イエス様は御愛の御方であられ、識らぬ事とは言え幾重にも罪を重ねる私達を見棄てる事なく、御自らのお生命をあの十字架に託されて、我らと共に永遠に生きる道を開いて下さったのであります。

ですから、私達が隣人に最高の愛を授けるには、此の福音を宣べ伝える事であり、一人でも多くの者に御救いに与って戴く事である、とのお説教に接した真面目な新しい信者は、果たして直ぐに従う事が出来るのかどうか？と言う事になります。

今日まで、自分が生きて来た信条とは異なる、例えば、これまで他人に宗教を勧めるのは“良い事では無い”と戒めて来た事に反する……。

是だけの事では無い、真面目な者の心の裡には、もっと多角な思いが起こり必ずや大きな憂いが生じて参ります。

◎『わが誠命は是なり、わが汝らを愛せしごとく互いに相愛せよ。

人その友のために己の生命を棄つる、之より大いなる愛はなし。』

(ヨハネ傳第15章12, 13節)

確かに、伝道する事が、信者として神様の御意に適っている事であり、むしろ、それは神様から各人に与えられた最善の使命である、との牧師のお勧めの前に、果たして自分がその任に相応しいか、となると素直になれないもう一人の自分が居る事に気付く事にもなります。

“愛”と言う単語一つを取り上げてみても、己が物として聡明を得る事の困難さを思い知らされる事になり、信仰の中での大きな“憂い”は単純に払拭出来るものではありません。

しかし、しかし、信仰とは、絶対者で在られる真の神・主イエス様を信じお服従して往く事なのです。

神様を畏れる者の熱心な祈禱は必ずお応えが戴ける、とは新・旧約聖書に一貫して記された神様の御旨であられます。

その“お証”は、教会でのお勧めの中に幾重にも語られております。

私たちの信ずる神・主イエス様と、世的な神々(偶像教の神々)との違いは、遜って真剣に祈る者の祈禱には幾度でも必ずお応えを戴ける事、即ち神様が其処に居られる如くに結果を以て顕れて下さいます。

冒頭の聖言(コリント後書第7章10節)の通り、

“悔なきの救いを得るの悔改め”に至れる者は、誠に幸いであります。

つまり、永遠の生命に至る喜びに満たされ、此の世に生を受けた本物の価値が改めて実感させられて参ります。

続くコリント後書第7章11節に、

◎『<sup>み</sup>視よ、<sup>うれ</sup>汝らが神に従いて憂いしことは、  
<sup>い</sup>如何ばかりの<sup>はげみ</sup>激励・<sup>べんめい</sup>辯明・<sup>いきどおり</sup>憤激・<sup>おそれ</sup>恐懼・<sup>したい</sup>愛慕・<sup>せ</sup>熱心・<sup>せ</sup>罪を責むる心などを  
<sup>うち</sup>汝らの中に生じたりしかを。』

神様のお導きは決して世俗的軽薄なものでは無く、ズッシリと重みのある心の成長へと導いて下さり、いよいよ私たちは神様に近付いて参ります。

以上、“<sup>うれ</sup>憂い”の語意に絡めて、“<sup>こい</sup>愛”と“<sup>から</sup>伝道”に触れて参りましたが、実は最近(新型コロナウイルス発生以来)、主イエス様の御再臨が近付きつつあるとの思惑が、私の脳裡から離れる事はありません。

米国の大統領選挙に当り、立候補者二人のテレビ討論が放映されましたが、その内容の異様に<sup>きょうがく</sup>驚愕したのは私だけではありますまい。

取分け現職のトランプ氏は、米国民の四分の一を占める<sup>キリスト</sup>基督教福音派を支持層の中核と成していると耳にしていただけに、<sup>クリスチャン</sup>基督者としての相手に対する<sup>き</sup>尊敬の念や<sup>へんりん</sup>気遣いの片鱗も無く、<sup>さえぎ</sup>司会者の忠告も無視して相手の発言を<sup>たけ</sup>遮り、<sup>しゆうたい</sup>憎悪と怒りの丈をまくし立てる<sup>へきえき</sup>醜態に辟易とするばかり。

対抗する元副大統領も、<sup>みことば</sup>キリスト教国の一員として意地を見せて<sup>き</sup>聖書の聖言を以てして斬り返す英知が欲しい処ですが、望む方が無理…？

どちらが当選するにせよ、<sup>まつりごと</sup>政治の<sup>かしら</sup>首は主イエス様であられ、<sup>しもべ</sup>愚かな僕の口出す事ではありませんが、<sup>つかさど</sup>民主主義の超大国を<sup>おとし</sup>司る大統領選挙が此の有様とは、<sup>とく</sup>全地球上の人心の徳を<sup>おとし</sup>貶めるものとは言えないでしょうか。

“三密”“ソーシャルディスタンス”など、<sup>わた</sup>長期に亘る<sup>か</sup>コロナ禍がもたらす生活習慣は、“<sup>あい</sup>愛”を以て互いに<sup>わ</sup>相和して行く事を<sup>と</sup>説かれる主イエス様のご意向に反した方向に進行しており、世の中は望むと望まざるとに<sup>かか</sup>拘わらず、<sup>か</sup>反時計回りが増幅されて来る傾向にある事に間違いはありません。

私の年齢から、それ程永くは此の地上に<sup>とど</sup>留まる事も無いでしょうが、<sup>い</sup>活かされている間は、主イエス様の御再臨が近付いている事に声を張り上げて行くべきである、と思わされております。

無論、空中再臨の折、<sup>けいきよ</sup>携挙される事を強く願う者の一人であります。

<sup>み</sup>異邦人が<sup>あずか</sup>御救いに与る<sup>み</sup>定数が満つる時に御再臨が<sup>みことば</sup>決行されるとの<sup>みことば</sup>聖言を信じて、一人でも多くの世の人々が<sup>くいあらた</sup>悔改めて御救いに与る為にも、我々が福音を<sup>の</sup>宣べ伝えて、主イエス様の御再臨が一日も早く到来する事を願うべきである、と強く思わされております。(ペテロ後3:12)

さて、その<sup>く</sup>“<sup>あらた</sup>悔い改め”に就いて、<sup>つ</sup>使徒行伝第1章と第2章を通して学び、本物の<sup>しゆつたつ</sup>キリスト教の出立を私達の心に刻み込んで戴きましょう。

前述した通り主イエス様は、私達の<sup>あがな</sup>罪の<sup>い</sup>贖いの為<sup>お</sup>に十字架に於いてお生命を<sup>おちから</sup>墮とされましたが、<sup>よみがえ</sup>預言の如く<sup>おちから</sup>甦られ四十日間人々の前に神の国を語られた後、御自身の御能力を以て

神々しく天へと昇って行かれました。

その主イエス様のご昇天をオリブ山に見送られたシモン・ペテロを始めとする11使徒達は、主のご生母マリヤ、主の兄弟達、及び弟子ら百二十名の者と共にエルサレムに集まっておりました。

丁度、エルサレムでは五旬節(ペンテコステ)と言うユダヤの三大祭りの日にあたり、パレスチナから離散して各国に住まう人々の帰還で溢れており、まるでコスモポリタンの大会的状況を呈しておりました。

百二十名もの主の信徒達が集まっている家に、突如激しい風が吹くような響きが起こり、彼等は聖霊に満たされ、主イエス様の御霊が宣べしむる儘に異邦の言(異言)で語り始めました。(使徒行伝第2章1節～)

周囲に響き渡る異様な発声音の許に、それぞれの国から来ていた敬虔なユダヤ人達が集まって来て、その声に耳を澄ますと、自分達の住まう国の言葉がはっきりと聞き取れるではありませんか。

彼らは、自分達の国言葉で“神様の大きいなる御業”が語られる其の状景に驚き怪しみ騒ぎ始めます。

そんな群衆の中には、『彼らは甘い葡萄酒を飲んで騒いでいるんだ』と言う者達もおりました。

そこで、使徒を代表する形でペテロが起ち上がって語り始めます。

『今は朝の九時であるから、貴方方が思うように酔っ払っているのでは無い。これは預言者ヨエルに依って言われていたもので、今、それが実現しているのだ』と言い、ヨエル書記載の文言を語り始めました。

#### ヨエル書第2章28節以降

◎『神いい給わく、末の世に至りて、わが霊を凡ての人に注がん。  
汝らの息子・娘は預言し、汝等の若者は幻影を見、  
なんじらの老人は夢を見るべし。』(28節)

◎『その世に至りて、わが僕・卑女に我が霊を注がん、  
彼らは預言すべし。』(29節)

ここで言われた“預言すべし”とは、神の霊(御霊)に頼り語らせられる“深き真理を説く”と言う事であります。

つまり、初めての聖霊降臨の折、使徒達が各国から来た者達に解るように、その国の言葉で語ったのは、使徒達が他国の言語に堪能であったのでは無く、末の世に至る将来、世界各国で神様の奥深い真理が語られる様子が、その時、聖霊の御能力を以て大衆の面前に披露されたのであります。

使徒達の語りを、その国の言語で語るのを、大衆すべてが聞き分けたのでは無く、『祭りの酒で酔っ払っているのだ』と、ただ単なる戯れ言として耳に受けた者達もいた事を考えますと、現代、我らの身の廻りにも当然の如く存在しており、選ばれた者のみ聞き分けた事になります。

神様の子供として、次の聖言に当て嵌まる者は幸いです。

◎『世の創の前より我等をキリストの中に選び、御意のままに  
イエス・キリストに由り愛をもて己が子となさん事を定め給えり』  
(エペソ書第1章4,5節)

さて、使徒ペテロは、主イエス様の此の地上での御働きを指摘し、ユダヤ人が主イエス様を十字架に追い遣り死に至らしめた事を糾弾し、現在、汝等が見聞きした不思議な光景は、甦って神様の右に挙げられた主イエス様が約束されていた聖霊を注いで下さったものだ、と説きます。

此处で大切な事は、聖霊が注がれると言う事は、唯そんな気がする、と言ったいい加減な物では無く、第三者がハッキリと見聞きが出来る状態で異言・霊言が語られる事を、使徒ペテロは強調しております。

最後にペテロは、聴く者達に(使徒2:36)

◎『イスラエルの全家は確と知るべきなり。汝らが十字架に釘けし  
此のイエスを、神は立てて主となし、キリストとなし給えり。』

ユダヤ教を確信するユダヤ人達が、神様が遣わされたキリスト(メシヤ=救い主)としてのイエス様を十字架に掛けて仕舞った事を確と反省するべきである、と使徒ペテロは強い口調で彼らを叱責します。

それを聴いたユダヤ人達は、大いに心を刺されてペテロや他の使徒達に問い掛けます。

◎『兄弟達よ、では、私達はどうすれば良いのか?』

ペテロが答えます。

◎『汝ら悔改めて、おのおの罪の赦しを得ん為に、  
イエス・キリストの名によりてバプテスマを受けよ、  
さらば聖霊の賜物を受けん。』(使徒2:38)

“悔改め”即ち、ヨハネ傳第3章5節で主イエス様が仰有った“水と霊のバプテスマ”に与る事である、と使徒ペテロが明言いたします。

嘗て、ヨハネ傳第3章にてユダヤ人の宰ニコデモ一人に対して明かされた御救いの真理が、此处でユダヤ人達に語られ、その後、引き続いて使徒パウロは、このように語り告げております。

◎『この約束は汝らと汝らの子らと、凡ての遠き者  
即ち主なる我らの神の召し給う者にとに属くなり。』(使徒2:39)

“凡ての遠き者”とは、総ての国々の者、つまり、真の神様を識らなかつた我々異邦人も含めて神様に選ばれた者を指しております。

“主なる我らの神の召し給う者”を突き詰めますと、御救いの権限は神様の占有事項、言葉を改めますと、神様の独擅場であられます。

これは、先に記しましたエペソ書第1章4節と5節の聖言、

◎『世の創の前より我等をキリストの中に選び、御意のままに  
イエス・キリストに由り愛をもて己が子となさん事を定め給えり』

つまり、此の地上での世の創りよりももっともっと古い昔に、御救いに与る者は既に決定されていた、と言う事であります。

只今現在、“水と霊”の御救いに与っている私達は、何と地球が誕生する以前から定まっていたとする聖言に、神様の御存在自体、私達には到底考えも及ばない次元の相違が感じさせられ、神様の仰有る総ての聖言も桁外れの御存在で在られる神様のお言葉である、と得心が参ります。

例えば、多くの宗教は、自らの宗旨を護る為には“戦争”をも厭わない、と過去に多くの争いが洋の東西を問わずに起こり無数の殺戮が繰り返されて参りましたが、我らの神・主イエス様は、◎『愛する者よ自ら復讐すな、ただ神の怒りに任せまつれ。復讐するは我にあり』(ロマ12:19)と、敵する者をも徹底して愛する事を示しておられる神様であります。

これが、素直に心の腑に落ちて参ります。

しかし此处で、御救いに与る者は神様に依って決定しているのだから、私達が福音を語る必要は無いのでは？、と言う事ではありません。

私達には、誰が選ばれて誰が選ばれていないか、全く判らないのです。

#### ロマ書第10章11節以降に

◎『聖書にいう“すべて彼を信ずる者は辱しめられじ”と。

ユダヤ人とギリシャ人との区別なし、同一の主は万民の主にましまして、

凡て呼び求むる者に対して豊かなり。』(11, 12節)

ギリシャ人とあるのは、異邦人を総称している事に留意して下さい。

◎『然れど未だ信ぜぬ者を争で呼び求むることをせん、

未だ聴かぬ者を争で信ずることをせん、

宣傳うる者なくば争で聴くことをせん。』(14節)

使徒パウロは、聞いた事が無い御方を信ずる事が出来るか、福音を語る者が無ければ誰も御救いに与る者が居ないではないか？と声を重ねます。

#### イザヤ書第43章10節

◎『エホバ(神)宣給わく汝らはわが証人わがえらみし僕なり』

#### 同じくイザヤ書第43章21節

◎『この民はわが頌美をのべしめんとして我おのれの為に造れるなり』

先に御救いに与っている私達は、その信仰生活の中で既に体験している数々の恩恵と憐憫ある神様の顕れを通して、神様の証人と呼ばれる立場に在り、神様は、此の者達を御自身の為に創ったと仰有います。

福音を語る事は、私達に与えられた最善の使命であると言われます。

感謝して、その使命に従う処に、マルコ傳第16章20節

◎『弟子たち出でて、あまねく福音を宣傳え、主も亦ともに働き、

伴うところの徴をもて、御言を確うし給えり。』

福音を語る者には、神様がお持ちの不思議な徴・奇蹟を以て御一緒に働いて下さる、と主イエス様のご意向が伝えられております。

さて、主イエス様の御昇天後、一度は故郷のガリラヤ湖の漁師へと逃げ返っていた使徒ペテロですが、主の聖霊を戴いて一変したかの如くにユダヤ人達に向かって果敢に真理を語り掛ける彼の勇姿に、筆者(私)も同じ聖霊を戴く者としての気持ちが昂ぶり、少しく横に逸れて仕舞いました。

が、聖霊を戴いた者がその事を深く自覚をしますと、確かに神様から与えられる不思議な変化が能力を帯びて顕れて参ります。

使徒ペテロの熱意は人々の心を捉えて、其の日バプテスマを受けた者は三千人とあり、正しく其の日こそ真のキリスト教の誕生の日であります。

最後に、御救いに与る我らの存在意義に就いて、聖言を一つ記します。

◎『汝ら我を選びしにあらざ、我なんじらを選べり。

而して汝らの往きて果を結び、且その果の残らんために、

又おおよそ我が名によりて父に求むるものを、

父の賜わんために汝らを立てたり。』 (ヨハネ傳第15章16節)

神様がお選び下さった我らに対する、神様(主イエス様)側の私達への目的であります、是はまた我らに対する神様のご要望でもあります。

“往きて果を結び”とは、信仰生活に在って、常に神様の喜び給う善き行為に依って立派な果を結ぶ事であり、“我が名によりて父に求む”とは、総ての事柄は、主イエス様の聖名に依って神様に求める内容の物を神様が与えて下さる為に貴方を選んだ、と仰有います。

私達は、大いなる恩恵を賜わる為に選ばれた、と言われるのです。

永遠の生命を賜わる主イエス様の御愛は偉大なる哉！ ハレルヤ！

(2020年11月4日 伊豆イエス之御霊教会 牧師 三崎 紘 文責)